

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

自然系コース(理科)／村田  
守

## ■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

## I. 学長の定める重点目標

## I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

## 1. 目標・計画

教員を高度専門職業人とするためには、教科専門の知識を深めねばならない。30数年前には現職教員の教科専門知識の欠如から、教員養成系学部で教科教育から教科専門へのシフトが求められた。その後、シフトの揺り戻しから、教科教育・実践教育シフトになり、教科専門教育がないがしろにされるようになった。そのため、教員は自ら教材研究を行わず(行えず)、指導書に頼る「公文のおばちゃん」教員が跋扈するようになってきている。これには、大学受験がセンター試験(高2までの内容)で代用されるようになり、個別学力試験(高3までの内容)を課す旧帝大を除き、受験生の大幅な学力低下も大きな原因である。また、大綱化以来、私立大学文系に小学校教員養成系学部・学科が開設され、教科専門知識が著しく乏しい教員が増産されていることを中教審は危惧しているのかも知れない。しかし、中教審は教員を高度専門職業人と無責任に言うのみで、大学カリキュラムの教科専門教育へのシフト無くして、高度専門職業人を養成することはできない。本年度の重点目標は、矛盾した内容に対して本学の抜本的な取り組み(具体的目標の明確化)を行わずに、教員個々の対応という小手先の技術に矮小化したところに問題がある。個々の教員が努力したところで、そのベクトルは千差万別の方向を向いており、決して統合化されることはなく、1年後ががんばって努力した教員ほど徒労感を感じることになるであろう。

- (1) 授業内容: 講義内容を理学部の教養部・一般教育部門のレベルまで引き上げる。受講生の少ない専門科目では、指導書の誤りや不備な点を学生が指摘できるようになり、自ら教材研究を行わねば嘘を教えていることになることを理解させる。
- (2) 授業方法: 学生が主体的に学べるように、また、講義に積極的に参加できるようにする。実験を行うことで、知識の統合化が進むので、お仕着せの実験ではなく、自ら発案した実験を工夫させ、指導書に頼らなくとも教材研究の行える教員を育成する。
- (3) 成績評価: 出席点を加味せず、厳密に試験成績のみで評価する。100名前後の大人数の講義では、試験結果が正規分布をとるであろうから、受講生の1/3程度が不合格になっているかを基準とし、試験問題の難易と採点基準の評価を行う。

## 2. 点検・評価

- (1) 学部授業の多くに長期履修学生がおり、その中に国立大学工学部出身者がいたために、彼らが指導書と首っ引きの「公文のおばちゃん」教員になるな!の講義の主旨を理解してくれて、実験や発表授業に積極的に取り組んだ。そのために、学部生にも私の講義の主旨が比較的早く理解されるようになった。教科書や指導書の通りに実験した場合の誤りに気付く学生も現れた。
- (2)(1)で記したように、学部生は国立大学工学部出身長期履修生に負けないように、実験方法を工夫し、積極的に講義に参加した。ライバル意識で互いに切磋琢磨でき、実験法を工夫することで、教科書上では細切れになっている知識の連関に気付く学生も現れた。また、評価するポイントを教えることで、評価されるために授業法を工夫する学生も現れた。
- (3) 初等理科(地学分野)では、小学校3・4年生社会教科書並びに小学校5年生国語教科書の題材を用い、文理融合の講義を行い、教科書の誤りも指摘した。試験問題は、中学校入試問題(理科)と小学校3・4年生社会教科書の問題が80%となるようにし、残り20%は所謂下駄を履かせる内容とした。地学分野の合格率(60%超)は48%であった。出題内容は全て講義で説明した内容であるが、長期履修生のみならず本学学生の多くが、小学校の理科と社会の内容を理解していないことが分かった。

## Ⅱ. 分野別

### Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

#### 1. 目標・計画

- (1) プレゼンテーションの能力を身につけさせる。
- (2) 自らの学力を正しく判断出来る機会を設け、自らの学びの動機付けの機会を与える:本年度重点目標実現のために、ゼミ、卒研・修論指導の他に、講義に於いても学生・院生が受け身にならないように努める。
- (3) 指導書に首っ引きの教員ではなく、自ら教材研究や実験方法の開発が出来る教員になれるように指導する:本年度重点目標実現のために、多くの実験・課題を課す。
- (4) 連合博士課程院生の指導のみならず他大学の院生や海外の大学の院生の指導も行う。

#### 2. 点検・評価

- (1) 教員採用試験1次に合格した指導学生は、毎年ほぼ全員採用されていることから判断しても、村田式プレゼン開発法は効果的であった。今後も引き続き同じ方法で指導したい。
- (2) 年度目標の点検・評価(1)及び(2)に記したように、競争すること・正しく評価されること知ることは学生にとっても役だったようである。
- (3) 授業科目にもよるが、毎週課題を出し、自主的に学ぶことの習慣化の一助とした。
- (4) 博士課程修了院生の博士論文執筆並びに投稿論文執筆指導を行った。香川大学工学部院生、ギリシャのアリストテレス大学博士院生、イランのタブリッツ大学博士院生、パキスタンのパーリア大学博士院生等の指導も行っている。

### Ⅱ－2. 研究

#### 1. 目標・計画

- (1) 専門分野において、内外からの高い評価を得続けられるように努力する。
- (2) 海外学術誌等に論文を公表する。
- (3) 国際学会等においても積極的に発表を行う。
- (4) 海外の研究者と共同研究を積極的に進める。

#### 2. 点検・評価

- (1) Elsevier社からのCite alertメールの受け取りや、Research Gateでの論文引用やダウンロード等から判断して、今年度も引き続き海外からの高い評価を得た。また、Island Arc誌(Blackwell社)等のレフリーも務めた。
- (2) 海外の国際学術誌に論文を公表した。1編はオンライン上で公表され<doi>取得済みであるが、Elsevier社の印刷が遅れており、冊子体での印刷はまだである。オンラインジャーナルで冊子体を発行しない学術誌にも公表したが、論文数のカウントで悩むことになった。個人業績報告後(1～3月)に、オンラインジャーナル(Springer社)及び冊子体学術誌(Elsevier社)に各1編の論文が掲載された。
- (3) International Conference of Educational Research(ニコシア)、理科教育学会(北大)、教大協研究集会(札幌全日空ホテル)等教育系の学会でも発表を行った。
- (4) 海外の研究者との共同研究は順調に進んでおり、それらの成果を国際学会や国際学術誌に発表している。

## Ⅱ－3. 大学運営

### 1. 目標・計画

- (1) 大学運営に参加する機会があれば、積極的に役割を果たす。
- (2) 本学が社会に開かれた大学であることのアピールできる機会があれば、積極的に役割を果たす。
- (3) 本学と他大学との大学間連携事業があれば、積極的に役割を果たす。

### 2. 点検・評価

- (1) 連合博士大学院の代議委員、また地学専門分野代表を務めた。
- (2) 徳島県中学校教育研究会理科部会(名西大会)講師、また、「吉野川の石ころ観察教室が文科省の教育文化週間イベントとして本学より唯一選定された。
- (3) 連合大学院プロジェクト(o)に参加し、成果を教大協研究集会で発表し、成書を協同出版から出版した。

## Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

### 1. 目標・計画

- (1) 附属学校・社会との連携の機会があれば、積極的に役割を果たし、大学で学んだこと・明らかにしたことを社会に還元する。
- (2) 国際交流の機会があれば、積極的に役割を果たす。
- (3) 外国人研究者の招聘や外国人研究者との共同研究・学術交流を積極的に行う。
- (4) 専門研究を一般社会に分かり易く普及するように努める。

### 2. 点検・評価

- (1) 上板町高志小学校の「命を守るプロジェクト」に参加し、パンフレット作成に協力した。アドバイザー等派遣事業では、後期5件を超えたので、いくつかの案件をお断りした。
- (2) 大学院に外国人留学生を受け入れており、国際交流を積極的に果たしている。また、耐火物のISO(国際規格)の日本代表として、ウィクトリア会議(9月)・ブリュッセル会議(3月)に経産省から派遣され、化学分析のプロジェクトリーダーとしてISO規格の作成に尽力している。
- (3) 社会連携センターに外国人客員研究員を7月から招聘する。そのための共同研究を積極的に進めた。
- (4) 協同出版から「生きる力を育む学校防災Ⅰ」及び「生きる力を育む学校防災Ⅱ」を出版し、普及に努めた。

### Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

教育研究の面では実りが多く、海外にも鳴門教育大学の名称を知らしめることができた。また、教員免許更新講習(2件3日)や一般向けの普及活動を積極的に行い、鳴門教育大学の情宣に努めている。